

トルコにおける棉花栽培と綿工業の発展

——地方都市アダナからみたトルコ近現代史——

比 佐 優 子

要 旨

本論文では、トルコ共和国の経済発展を、オスマン朝末期以来、主要輸出品である棉花栽培と、共和国成立以後の経済政策において中心的な工業であった繊維産業に焦点を当て、経済発展と社会変容について考察する。地理的、政治的にも国家の中心部からはなれた、東南部の都市アダナの事例を挙げ、この地方における農業部門の近代化と綿工業の発展を、その担い手に着目し中央政府による経済政策と地域経済の関係を考察する。そして19世紀末以降、アダナの棉花栽培の拡大による大土地所有制の形成と、綿工業の発展によるトルコ民族資本家の形成といった経済構造と社会構造の変容を浮き彫りにすることで、近現代トルコの経済史を再考することを目的とする。

1. オスマン朝の経済構造と共和国の経済政策

トルコ共和国の設立は、1923年にオスマン朝からの独立戦争の勝利によってもたらされた。しかし、経済的にはヨーロッパ各国への債務返済、国土の荒廃という苦しい状況からの出発であった。また、オスマン朝末期には経済活動の担い手が、国内のギリシア人、アルメニア人、ユダヤ人など、非イスラム教徒や外国人が中心であったが、アルメニア人への虐殺、第一次世界大戦、ローザンヌ条約による住民交換協定等によって、彼らが国外流失したため、産業・商業部門での資本家層の空洞が生じた。(表1.2)新しい政府の課題は、この空洞を短期間に埋め、民族資本家を育成し、経済を発展させることにあった。¹⁾

表1. 主要都市の非イスラム教徒構成比(%)

県	19世紀末	1927年
アダナ	17.8	9.0
アンカラ	32.6	5.2
ブルサ	24.1	3.2
エルズルム	31.5	0.1
イスタンブル	55.9	35.2
イズミル	61.5	13.8
トラブゾン	42.8	1.2

(出所) Osmanlı Nüfus İstatistikleri 1500-1914 p.64

表2. 1927年宗教別人口構成比(%)

宗教	比率(%)
イスラム	98.14
カトリック	0.29
プロテスタント	0.05
ギリシア正教	0.6
アルメニア正教	0.18
その他のキリスト教	0.61
その他	0.13

(出所) Nüfus Sayı 1927 p.60

国家による経済政策が本格化するの、1930年代である。1931年の共和人民党大会では、ケマル・アタチュルクが国家体制の枠組みである共和主義・人民主義・世俗主義・国民主義・改革主義に加え、新たにエタティズムを唱えた。このエタティズムとは、虚弱な民族資本を保護・育成するために、政府が積極的に金融部門や重工業の経営に参加し、国営企業とこれに関連する民間企業を育成する国家主導型の経済政策を示す。³⁾そしてこの時期、鉄道を中心とした国内交通網の整備、貿易の管理、銀行の創設、国営企業の設立をおこない、世界恐慌以後、輸入代替政策のもと第一次5ヵ年計画を実行した。⁴⁾

一方、民間産業への支援策は1927年の産業奨励法の改正によって始まる。新しい法律では、1927年から42年までの15年間を期限とし、新規開業者への用地の無償提供、所得税の免除、独占等の特権、また生産された製品が一定の基準を満たす場合には、国際市場の価格に関わらず政府が買い上げることなどを定めた。⁴⁾そして33年にはシュメル銀行が設立され、紡績・繊維業の出資とその運営を開設し、繊維部門の発展に重点がおかれた。⁵⁾

2. アダナにおける棉花栽培

アダナは地中海沿岸に面したトロス山脈を背に、セイハン河の河口に広がる国内最大の海岸平野であるチュクロバ平野の中心的都市である。今日では国内の第5位の都市として、棉花や小麦の農業生産と、繊維や化学などの工業都市として知られている。

この地方の歴史は、オスマン朝帝国のもとでも、長い間遊牧民の天下であり商業ルートの中継地として繁栄した。しかし、1833年にこの肥沃な土地の農

地としての潜在的能力に目をつけた、エジプトのイブラヒム・パシャの軍事的侵入によって、棉花栽培地として開発が始まった。彼の軍隊は1840年のロンドン国際会議によって撤退し、オスマン朝の統治下へと戻ったが、1861年のアメリカの南北戦争による綿花危機によって再び注目を集めた。

綿花の国際価格の急騰に目をつけたオスマン朝政府は、1866年軍隊を投入し、この地方を支配する遊牧民の豪族を討伐し、強制的に定住させ棉花栽培をおこなわせた。⁶⁾ 同時期、国内の裕福なアルメニア人の地主や商人も、商品作物として棉花栽培に注目し、肥沃なアダナ中心部の土地の買占めに乗り出した。⁷⁾ こうしてオスマン朝末期には棉花の生産地として、多い年で国内生産高の約6割、平均して3割を生産するに至った。⁸⁾

2.1 棉花の品種改良

以下では品種改良の特徴とそれがもたらす社会的影響について分析する。亜熱帯作物である棉花の栽培には気候条件等の地理的条件が重要となる。一定した暑さと、明確な温度差を必要とし、また土地の凍結は大敵である。成育には5月～6ヶ月かかり、この間の最低気温が5度を上回らなければならない。さらに発芽の後は22度～25度、実を結ぶ頃には37.5度以上の急激な気温の上昇が必要とされる。また生産性には、降水量や湿気、連作などが影響する。⁹⁾ トルコでこの条件を満たす地域は、地中海、エーゲ海の沿岸部である。

19世紀末には綿花ブームの終結とともに、エーゲ海沿岸部産に品質で劣るアダナの綿花価格は急速に下落する。これに対し、19世紀末からアダナでは棉花の品質改良がおこなわれる。それはイギリス人やフランス人によるエジプト産やアメリカ産の導入にはじまり、共和国の成立以後も1920年代から80年代の間に、主要な品種だけでも8種類の作付けが行われ、次第に品質の改善をもたらした。

在来種 (Yerli)

そもそもトルコの在来種 (yerli) は、オスマン朝時代にインド経由でアナトリアに広まった (Herbaceum という) 品種であり、雨には強いが、生産性が低く、繊維も短く、寝具の詰め綿として自家消費用に生産され、市場には出回らなかった。

エーゲ海沿岸ではマイドス (Maydos Yelisi), 赤色種(Kırmızı Yerli)というアジア原産種が中心に広まった。両者は品質的には同じだが、赤色種の方が生産性が高く紡績工程の消耗が少なかった。アダナではマイドス種に近いYerli 193が普及したが、繊維の長さはいくぶん短かった。よって、在来種でもアダナ産の棉花はエーゲ海産のものに比べ品質、生産性で劣っていた。しかし、在来種の一般的な特徴は、繊維が短い点と棉実の殻が閉じた点にあり、これらの品種は1940年代後半以降、急速に減少していく。⁹⁹

アメリカ原産種

19世紀末以降、綿花危機によってアダナは、棉花栽培地として国際的にも注目が集まり、外国人が経営する近代的繊維工場が進出した。そしてこれに従い、ヨーロッパ人によって、アメリカ産の品種の導入がはじまった。¹⁰⁰ 共和国の成立後もこの試みは続き、1945年以降、改良品種の栽培の成功によってアカラ種(Akala)やココール種 (Coker), デルタピン種 (Deltapine), カロリナ・クイーン種 (Carolina Queen) が続々と導入された。¹⁰¹

特に1940年代後半からのアカラ種の特徴は、棉花の殻が弾けた状態で収穫時期を迎える点で、従来の在来種と大きく異なった。これは地中海性気候のアダナでは秋から雨季に入るため、9月末から10月はじめの3週間以内に収穫することが条件となった。

ココール種 (Coker) は1948年にアメリカから持ち込まれ、6~7年の研究の結果1960年代に実用化に成功した。この種は従来のアカラ種よりも、風に強かつ繊維も長く、紡績の段階での生産性を向上させた。同時期に輸入されたデルタピン種 (Deltapine) は乾燥した土地にも強く、灌漑の遅れた地域や乾燥した土地での栽培に貢献した。1960年代には新たな品質であるカロリナ・クイーン (Carolina Queen) がより、病気に強く生産性が高いため、標準的な品種として広まった。

こうした改良品種の作付けは天水地と灌漑地で生産性が約2倍異なり、灌漑の整備が不可欠であった。(表3) そのため民間によって灌漑整備が急速に普及し、次第にアダナの棉花の生産性は改善されてゆく。(表4)¹⁰²

表3. 改良品種の生産性-灌漑地と天水地-

品種名	灌漑地	天水地
デルタ・ピン	329	182
カロリナ・クイーン	329	174
コカール	318	170

(出所)Hamdi Kara "Çukurova'da pamuk." p178

表4. アダナの棉花生産

年	作付け面積(千ha)	生産量(千t)	生産性(kg/ha)
1925	100	15	150
1940	200	30	150
1950	250	45	180
1956-60	252	48.4	192
1961-66	268	82.4	307
1967-76	247	130.1	527

(出所) Yurt Ansiklopedisi p.74-75より作成

2.2 農業の機械化

アダナは19世紀後半に農業の潜在的な可能性が注目され開拓された地域である。その大きな特徴は、トルコ国内の他の地域とは異なり大土地所有制が存在した点である。実際、当初からアメリカの南部の棉花栽培をモデルにしていたのである。トラクターの導入は、19世紀末にはじまり、共和国設立直後にはすでに69台がアダナに存在した。⁶⁰

農業の機械化は、戦後1950年代の国内農業ブームによって急速に進む。それは、1948年から52年のアメリカ合衆国からのマーシャル援助と、大戦によって農作物の生産が落ち込んだヨーロッパへの輸出の増加、および政府が農業部門を重視したことにはじまった。

合衆国のマーシャル・プランの内容は主に道路を中心とした国内交通網の整備とトラクターの導入であり、その購入に関しては年利2.5%の6年間のローンが承認された。

この間アダナは、最もトラクターが導入された地域となり、1948年の666台から、51年には3倍の2200台へと増加した。(表5) また、道路を中心とするインフラの整備が急速に進んだ。これはアダナ近隣のイスケンデル米軍基地が、次第に冷戦構造をみせるソ連への前線基地として重視されたこととも関係があった。

農業の機械化は幹線道路沿い、アダナ中心部からジェイハン、カラタシュ、コザンを中心に広まり、これらの地域で大規模農場が形成され、棉花栽培が広まった。⁶¹(表6)

表5. トラクター保有数 (台)

年	アダナ	トルコ
1948	732	1750
1952	4030	31415
1963	5816	50844
1970	8909	105865

(出所) Yurt Ansiklopedisi p.81

表6. 郡別トラクター保有数(1964年)

郡	台数
アダナ中心部	1238
ジェイハン	1381
カラタシュ	1080
コザン	632
その他	1007
合計	5338

(出所) 表4に同じ

3. 繊維産業の発展

3.1 国家による繊維産業の奨励

トルコの最初の産業化政策はタンジマート期（1839-76）年⁹⁸にさかのぼることができる。1835年にはイスタンブルに最初の工場が設立されて以降、イズニットやイズニット、ブルサなどに工場が政府によって建設された。こうした工場は軍隊の必需品を供給するのが目的であった。しかし民間でも外国人や国内の非イスラム教徒によって、1860年代にはブルサ、コンヤ、イズミル、アダナ、トロスと国内各地へと広まりをみせた。

1913年の工業統計によると⁹⁹、10馬力以上の動力を有する繊維工場が11箇所存在していたが、第一次世界大戦や共和国の設立等の混乱を向かえ、多くが休業状態となった。

共和国設立直後の1923年のイズミル公会議⁹⁸では、政府による民族産業の育成・保護、国民的な金融機関の創設などが提案され、1913年の産業奨励法の改正が論じられた。まず政府は、1925年に工鉱業銀行を設立し、さらに1927年には新産業奨励法を制定し、国内原料を優先して使用する事を義務付けた。1933年にはシュメル銀行を設立し、繊維産業をこの銀行の傘下にまとめ、さらに「第一次五ヶ年計画」では1939年までに綿織物の国産化を目標とし、国内3ヶ所に大規模な近代的繊維工場を設立した。

3.2 アダナにおける繊維産業の発達

アダナを代表とする綿工業の歴史は、共和国以前に外国人や非イスラム教徒によって紡績工場が設立されたことに始まる。アダナにおける最初の近代的工場は1864年フランスの技術者Justin Daudetの手によって設立された紡績工場である。この工場は1876年にはジェイハン郡に移転し、戦後はハッサン・ヤシル（Hasan Yeşil）が購入し、経営にあたった。第2番目の工場として少数民族出身のH.トラパニ（Havace Tirpani）が1885年に設立させたトラパニ工場では、ヨーロッパから1899年に2688錘の紡績機と1901年に3台の織機を購入し、アダナで最初の近代的綿織物工場を設立させた。1906年には同じく少数民族のシミヨンオウル（Aristidi Kosma Simyanoğlu）が2番目の製糸工場を設立させたが、共和国の設立や第二次世界大戦中に発布された富国法の影響の

もと、これらの工場はトルコ人資本家や、農業銀行、シュメル銀行に売却され、最終的には国営化された。⁹⁹

共和国設立後のアダナの産業は、若干の綿花関連の他は加工工場のみだった。1927年における工業部門の労働者6119人の内、繊維業が3052人で全体の半数を占めていた。労働者数10人以上の工場63カ所のうち、繊維産業は38カ所あり、そのうち50人を越えるものは21カ所で、繊維産業に17カ所が集中した。また、共和国初期のアダナの貿易品目をみると、綿花、穀物、胡麻、乾燥果実などの農作物を輸出し、農機具、機械類、石油、繊維製品、香辛料を初めとする消費財、中間材を輸入した。¹⁰⁰ アダナではこの頃から繊維産業に特化する傾向があったが、それも紡績業と製糸業のみで、綿布等は依然として国外・県外からの輸入に頼っていた。

1930年代の世界恐慌の影響で外国からの輸入は激減したことを契機に、政府は、綿製品の国産化の実施を計画し、1930年代には産業奨励法が公布された。これによって繊維産業が奨励され、シュメル銀行が設立され、既存の大規模な繊維工場は次々と国営化され、この銀行を中心として綿製品の生産は次第に増加した。アダナは当時、紡績業、製糸業に特化し、綿布の生産には遅れをとり、国外・県外からの輸入に頼っていた。綿布は世界恐慌の影響によって、外国からの輸入の道が閉ざされ県内での生産が模索され始めた。

政府の政策の影響がアダナに訪れるのは、1940年代の後半のシュメル銀行の投資に始まる。同銀行は1946年にはマラティヤ織物工場、TAS繊維工場を購入しシュメル銀行カイセリ綿工場、アダナ綿織物工場を、49年にはシュメル銀行綿花工場、アダナ綿花取引・紡績工場を設立させた。

さらに第二次世界大戦中には綿糸・綿布の輸出の需要が急速に高まり、こうした大規模な繊維工場では日に3交代制で稼働した。また農産物、特に綿花の価格も高騰をみせたことで繊維工業への関心が高まった。¹⁰¹

シュメル銀行の活動と戦争の好景気はアダナの民間部門の経済活動、この国営工場との綿花取引を通じた商業を活性化させ、非イスラム教徒にかわる民族資本家を育成した。そのなかに近隣のカイセリ県の出身者であり、今日トルコ最大の企業グループであるサバンジュ・グループの創始者ハジュ・オメル・サ

バンジュやサブマズ・ホールディングのサブマズ兄弟もいた。1948年には、これらアダナとカイセリのトルコ民族資本家たちの共同出資によって、民間の銀行であるアク・バンクをアダナに設立するに至った。²³

1950年に誕生した民主党政権はマーシャル・プランを初めとする外国からの援助、戦争中に資本を蓄積した民族資本家に支えられ、民間部門の経済発展を重要視した政策を打ち出した。その結果アダナにおいても民間部門への資本投資が活発になり、大規模な紡績工場が設立された。労働者10人以上の企業の数は1949年から54年にかけて26カ所から50カ所に倍増し、そのうち繊維工業の伸びは最も大きく16箇所から30箇所へと増加した。(表7)なかでもギュネイ産業とBOSSAは民間部門における紡績工場のなかでもトルコ有数の規模を誇り、3000人以上の労働者が働く近代的な工場であった。²⁴

表7. アダナ 企業数の推移

産業	1940年以前	1944年	1949年	1954年	1959年	1964年
食品・飲料	2	2	5	8	11	15
タバコ	1	1	1	1	2	2
繊維	6	10	16	30	37	43
材木業	-	-	-	1	2	3
製紙・印刷	-	1	1	3	5	8
鋳物	1	-	-	1	2	4
機械	-	1	1	2	2	3
その他	1	2	2	4	6	7
合計	11	17	26	50	67	85

(出所)Sanayii İşyerleri Sayımı ;İmarat Sanayii 1964

*労働者数10人以上又は10馬力以上の動力を持つ企業を対象

このような経済活動の活性化は、チュクロバ地方全体にも広がった。そしてアダナは交通の要所としての重要性を増し、オスマンリエから東部のガジアンツェツェプ、イチェリ、コンヤへとつなぐ国道が新たに建設され、農村部の生産地と都市部の工場とを結ぶ輸送手段が発達し、商品作物を生産する大規模農場の経営者は各地で商業から紡績業などの工業部門に参入した。²⁵

1964年、民間企業の占める割合は、すでに9割を越えていた。これらは主に農業生産物を原料とする製造業で、その原料の9割までがアダナで供給された。また1960年代では、綿工業から成長し資本を蓄積した一部の資本家は、

さらに収益性の高い部門へ投資することを模索しはじめ、新たに化学繊維に注目する。そしてサバンジュが1963年にはSASAを設立し、ポリエステルを初めとする化学繊維の生産を開始する。この時期の繊維産業に対する民間部門の投資は、1962年から65年の間に40%の上昇を記録した。さらに1970年代にはいと工業部門における多角化の傾向はいっそう進展し、化学繊維から化学工業への移行がおこなわれた⁶⁶。

4. 地域社会の変容

オスマン朝の末期19世紀以後、アダナの社会構造が商品作物である綿花をめぐり約一世紀の間に急速な変化を遂げた。Hinderick and Kiray(1970)の研究によれば、19世紀には商業ルートの一拠点であった、トロス山脈の裾野の平野に、棉花の栽培地として注目されたことから、アダナの近代史が幕を上げる。かつての遊牧社会は国家支配の管理下におかれ、遊牧民の定住化が強制的におこなわれた。この過程で政府に従った遊牧民の族長達には多くの土地が分与される一方で、部族民が小作人として定住させられ、部族制を伴う半封建的ともいえる地主制度が定着した。こうした族長や、棉花栽培の取引に着目した都市部のアルメニア商人によって棉花栽培がおこなわれた。そして、労働力が不足すると、今度は近隣のアラブ系住民やマケドニアからの移民によって補われた。19世紀にはトラクターの導入も始まり、棉花生産の拡大に伴ない、近代的繊維工場がヨーロッパ人の手によって経営され工業化のはじまりを迎え、生産された綿花は、国際市場や又は直接的にドイツなどに供給された。

共和国の成立はこうした社会構造に一つの転換期を与えた。Keyder(1994)によればまず、第1次世界大戦の動乱のなかで生じたアルメニア人の虐殺によって地主階層の一端である彼らの存在が大幅に縮小した。こうして所有者の不在となった土地は国有化され、新政府が独立戦争の功労者に分配した。同時に操業停止状態にあったアルメニア人やヨーロッパ人の経営する工場が政府の管理化におかれ、エタティズム政策によって新たに国营工場として再建され、これを軸として棉花栽培や商業に関わる民族資本家を育成した。

この工業部門での発展に従い、棉花栽培も変容する。まず、こうした近代的工場では、原料となる棉花として、改良品種のみが使用されたため、高価な値

で取引される改良品種の栽培は、1950年代の急速な繊維産業の発展に伴ない、瞬く間に広がった。

しかしこの新種の棉花の導入は、これまでの在来種にない特徴、つまり綿実が弾けた状態で収穫されるため、短期間で収穫を必要とした。そのため次第にこうした農場では小作農に代わり季節労働者が次第に導入された。

さらに、改良品種の生産性には灌漑の有無が大きく寄与するため、自らの資金で灌漑をおこなえる裕福な農民層の間でまず広がった。こうした傾向は、1950年代のトラクターの開墾によって拍車がかかる。トラクターが導入された地域では、新たに開墾した土地で、大規模な農場で棉花栽培がおこなわれた。(表8)。その結果、共和国始めには10ドヌム以下の経営規模の世帯数割合が18%、50ドヌム以上が46%であったのに対し⁸⁾、作付け面積が2.5倍以上に増加したにもかかわらず、1960年代には23.4%と26.8%へと変化し、この間に大規模な農場経営が拡大したといえる。その傾向は表8に示されるように、全体の約30%を占める農地が3.7%の世帯によって経営されていた。

表8. アダナ 経営規模

(単位:dönüm)

規模	0-10	11-25	26-50	51-75	76-100	101-200	200以上
世帯数(戸)	12609	13316	13450	4983	3515	3946	1983
合計面積(dönüm)	79136	246062	507858	310380	317334	585538	861386
平均経営規模(dönüm)	6.3	18.5	37.8	62.3	90.3	148.4	434.4
世帯数の比率(%)	23.4	24.8	25.0	9.3	6.5	7.3	3.7
経営面積の比率(%)	2.7	8.5	17.5	10.7	10.9	20.1	29.6

(出所) D.I.E, Köy Evvanter Etüdü 01 Adana, 1964 p.50-51

*1 dönüm=0.919ha

Kara(1975)によれば、この変化は平野部での農村内部にも影響を及ぼした。1930年代以降、アダナの農業は、棉花を中心に小麦を裏作として栽培していた。しかし第二次世界大戦後、工業部門での棉花の需要が高まるにつれ、棉花に作付けに特化する傾向を強め、小麦との二毛作の体系は崩れ、またトラクターによる耕作面積の拡大により、村の共同利用地や休閑地が減少した。

農民は、都市に住む大規模な農場経営者(Kentli ve Büyük İşletmeleri)、家族経営の自作農(Aile İşletmeleri)、分益小作農(Yarıcılık)や小作農(Kiracılık)に分類できる。このうち農業の近代化によって最も影響を受けたのは、分益小作農と小作農であった。

またトラクターの導入や棉花の改良品種の登場によって、耕作期や収穫期で

の農村内の小作農の役割が低下し、特に収穫期には、短期に大量の労働者を必要とするため、始めは近隣の村から、次第に東部の山岳地域の農村より、半農半牧を営むグルド人が部族単位で大量に低賃金で季節労働者として出稼ぎに来るようになった。こうしたなか、分益小作農 (Yarıncılık) の取り分は従来、収穫量の半分であったのに対し、次第に3分の1(Uçtebircilik) から4分の1(Dörtebircilik) へと減少してゆく。

同様に家族経営の自作農 (Aile İşletmeleri) にも変化が起こる。新種の棉花栽培は、肥料や灌漑の整備を必要とし、小規模な自作農では資金的に困難であった。改良品種の登場により農地価格の上昇と買占めがおこり、次第に借金の担保として土地を手放し没落する農民が増加し、彼らは農村で農業労働者になるか、拡大するアダナの都市部へと移住した。⁵⁾

一方、1950年代には、綿花取引を通じて資本を蓄積した商人のなかで、農場経営や工場経営に参入する傾向がみられた。特に近代的大規模繊維工場を設立したサバンジュは、1940年代後半以降、次々と土地を購入し、大規模な農場経営をおこない、直接工場へ原材料の供給をおこなった。⁶⁾ こうした経営者は都市に居住し、農村部からの利益は、繊維産業や建設業へと投下された。1960年までにこの傾向は顕著になり、チュクロバで生産され農業部門からの収益の約半分が都市の農場経営者、商人、企業家に渡った。⁷⁾

こうしてアダナでは繊維産業以外にも、急速な人口増加と都市部の需要に対応して食品産業、建設業などが成長する。そしてトルコ国内で他の地域の工業部門が依然として国営企業に依存するのに対し、アダナは繊維産業を中心に民間の民族資本家によって、独自の発展を遂げた。

5. 結論

オスマン朝や共和国の中心とも地理的に離れた、アダナの19世紀以降、国際取引における棉花の環境変化とそれに対応する政府の政策に影響を受けつつも、トルコの他の地域とは異なる発展を遂げた。19世紀にアダナの近代史が幕開けし、棉花を中心とした農業が展開され、トルコでも数少ない大土地所有

制が形成された。しかし、この地方の土地所有の形成はオスマン朝に由来するものの、その経営主体は非イスラム教徒や遊牧民の部族性の特徴を有していたが、戦後は品種改良と機械化によって経営を拡大させたトルコ民族資本家へと移行する。同時にこの変化は農村内部では小作農の没落、季節労働者の導入を促進させた。このように、大規模な農場も一貫して存在してきたのではなく、各時期の国内及び国際的な環境に大きく影響を受け幾度も変容、再建されたと見える。

同様に工業部門でも、19世紀末の担い手は外国資本家と非イスラム教であったが、戦後は棉花栽培や取引によって資本を蓄積した民族資本家を中心となった。1970年以降、非効率な経営を続ける国営企業を中心とした産業構造への批判と改革が要求され、トルコ経済が混乱するなか、すでにアダナは、民間部門を中心とした、活発な経済活動が始まっていた。そして、繊維産業で成功をおさめた民族資本家は70年代には化学工業への進出に成功を遂げた。

こうして、19世紀後半、綿花危機によってオスマン朝政府が遊牧民の強制定住させ、棉花栽培を開始して約1世紀の後、ようやくアダナでは棉花栽培を中心とした経済構造からの移行が始まった。

参考文献

- Z.Y Hershlag, *TURKEY the Challenge of Growth*, Netherlands, 1968
- Korkut Boratav, *Türkiye İktisat Tarihi 1908-1985*, Grçek Yayınevi, İstanbul
- Çağlar Keyder, "The agrarian Background and the Origins of the Turkish Bourgeoisie." *Developmentalism and Beyond*, Cairo, 1994 Ed by Saad Eddin Ibrahim, Çağlar Keyder
- , *Dünya Ekonomisi içinde Türkiye*, İstanbul, 1982
- Yahya Tezl, *Cumhuriyet Döneminin İktisadi Tarihi*, Tarih Vakfı Yurt Yayınları, İstanbul, 1994
- Ayşe Buğra, *Devlet ve İşadamları*, İstanbul, 1995
- Ticaret Borsası Adana, *Adana Ticaret Borsası Yılığ*, Adana, 1977, 1983
- Öğuz Akutan, *Türk İşadamı ve İşletmesi*, Ankara, 1996
- Yurt Ansiklopedisi yayın kurulu, *Yurt Ansiklopedisi*, İstanbul, 1981
- Jan Hinderick and Mübcecel b.Kiray, *Social Stratification as an Obstacle to development; a*

study of four turkish village, 1970

Hamdi Kara, “Çukurova'nın üç köyünde tarım-nüfus ilişkileri ve bölge kir kesimi sorunda bir inceleme.” *Geografya Araştırmaları Dergisi*.(G.A) pp159-192, 1977

---, Çukurova'da pamuk. in (G.A) pp159-208, 1975

John Hiltner, “Land accumulation in the Turkish Çukurova.” *Journal of Firm Economy*. vol 142, no3, 1960, pp179-203

Mehmet Aydemir, *Türkiye'de Pamuk Üretimi ve Yetiştirilen, Cesislerin karakteristikleri*.1973, Uluslararası Pamuk ve Pamuklu Sanayi Semineri için hazırlanmıştır.

Nühket Sirman-Eralp, Pamuk Üretiminde Aile İşletmeleri. Türkiye'de Tarımsal Yapılar. Ed by Şevket Pamuk, Zafer Toprak, Ankara, 1988

Adana Sanayi Odası(A.S.O), *Cumhuriyetin 60 yılında Adana Sanayii*. Adana, 1994

Türkiye Ticaret Odaları Sanayi Odaları ve Borsaları Birliği, *Türkiye'de Pamuk İpliği ve Pamuklu Mensucat Sanayii*, Ankara, 1958

Emre Dölen, *Tekstil Tarihi*. İstanbul, 1992

Faculty of Political Science. University of Ankara, *Farm Mechanization*. Ankara, 1953

Sakıp Sabancı, *This is my Life*. Avon. 1985

T.C.Başbakanlık Devlet İstatistik Enstitüsü(D.I.E), *Köy Envanter Etüdü 01 Adana*, 1964, Ankara

---, Cem Behar, *Osmanlı Nüfus İstatistikleri 1500-1914*, Ankara, 1996

---, *Umumi Nüfusu Tabirini*, Ankara, 1927

---, *Sanayi İstatistikleri 1932-39*, Ankara

---, *Türkiye'de Toplumsal ve Ekonomik Gelişmenin 50' Yılı*, Ankara, 1973

---, *Osmanlı Sanayii 1913, 1915 Yılları Sanayii İstatistiki*, Ankara, 1997

後藤 晃 「トルコの工業化政策とエタティズム—経済統計の分析を通して—」
『商学論叢』第36巻 第3号 2001年

永田雄三, 加賀谷, 勝藤猛 『中東現代史1』山川出版社, 1982年

鴨澤 巖「トルコの国家資本主義」『アジア・アフリカ研究』6:10 p.3-26

護 雅夫 『トルコの経済と社会』アジア経済研究所, 1968年

- (1) Çağlar Keyder, "The agrarian Background and the Origins of the Turkish Bourgeoisie." *Developmentalism and Beyond*, pp.53-58
- (2) 護 雅夫 『トルコの経済と社会』 pp.100-125
- (3) 後藤 晃 「トルコの工業化政策とエタティズム—経済統計の分析を通して—」P.219
- (4) 永田雄三, 加賀谷, 勝藤猛 『中東現代史1』 p.167
- (5) Emre Dölen, *Tekstil Tarihi*, pp.433-439
- (6) オスマン朝政府は、この時期国内の綿花生産と繊維産業の発展を目的に綿製品の免税措置や流通システムを簡素化させ、新規の産業家に対し免除特権を与えた。『中東現代史1』 p.167
- (7) Jan Hinderick ve Mubeccel b.Kiray, *Social Stratification as an Obstacle to development; a study of four turkish village*, pp.63-83
- (8) Yurt Ansiklopedisi, p.38
- (9) Hamdi Kara Çukurova'da pamuk p.161, 1975
- (10) Mehmet Aydemir *Türkiye'de Pamuk Üretimi ve Yetiştirilen, Cesitlerin karakteristikleri*, 1973
- (11) *Yurt Ansiklopedisi*, pp.74-75
- (12) Ticaret Borsası Adana, *Adana Ticaret Borsası Yılığ*, Adana, 1977
- (13) Mehmet Aydemir, *Türkiye'de Pamuk Üretimi ve Yetiştirilen, Cesitlerin karakteristikleri*
- (14) Yurt Ansiklopedisi, p.81
- (15) Richard. R.Robinson *Tractor in the Village a study in Turkey*, pp.451-462
- (16) タンゾィマートとは1839年の「ギュルハネ勅令」の発布から、1876年の「ミドハト憲法」発布にいたる時期に行われた改革の諸成果であり、スルタン=カリフ制を立憲思想で説いた点から、トルコの近代化の出発点とされている。
- (17) 1913年の産業奨励法は民間部門の産業発展と鉱業経営に対する免税措置と特権を与える内容であった。1927年に共和国政府でもこの法律を改正し採択した。
- (18) この会議の出席者は産業部門、商業部門、農業部門、労働者の代表が参加したが、会議は商業と農業の代表者が支配的であった。産業に関する項目は民間部門の発展のために、国産原材料を使用する企業への支援を与えることが決議された。しかし当時の産業についての統計はなく、共和国初の工業統計は1927年におこなわれた。
- (19) Emre Dölen, *Tekstil Tarihi*, p.445
- (20) *Yurt Ansiklopedisi*, p.92
- (21) *Ibid*, p.92
- (22) AK Bank のAKはアダナのカイセリ出身者という意味があった。カイセリ県の出身者は当時綿花取引に従事する者が多く同郷コミュニティを形成していた。Sakıp Sabancı, *This is my Life*.
- (23) 1956年に、Bossaは織機 450台、生産量1407万メートル、これに対しギュネイ産業は織機600台生産量2220万メートルであった。
- (24) Öguz Akutan, *Türk İşadamları ve İşletmesi*, 1996
- (25) *Yurt Ansiklopedisi*, pp.94 - 96
- (26) 1940年代にはセイハン・ダムの建設が始まるが、1960年代にいたっても政府は民間の6分の1の約1万haにすぎず、またその傾向も綿花栽培地に偏っていた。
- (27) また1950年以降都市部において不法占拠による住居が増加する。こうした地域はゲジェ・コンドゥと呼ばれ国内の大都市各地に急速に広まり、戦後の大きな社会問題となった。Yurt Ansiklopedisi
- (28) その典型的な例としてサバンジュは1949年に1000haの面積のムスル (Musırlı) 農場、1953年、630haのチェリク (Çirik) 農場、57年、3000haのサキユル・パシャ (Sakır Paşa) 農場を購入。これらの農場では繊維工場への綿花、植物油向上へのヒマワリなどの栽培がおこなわれた。Sakıp Sabancı, *This is my Life*, 1985
- (29) アダナ都市部に居住し農業を営む者の割合は、タルスス群で35%、カルタシュ群で24%、ユムルタルックで22%であった。Hamdi Kara Çukurova'da pamuk, pp.172 - 174